

となりの柳田國男

岡村, 民夫

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

34

(終了ページ / End Page)

40

(発行年 / Year)

2011-04-01



となりの柳田國男

岡村民夫

20年ほど前、まだ大学院生だった私は、ジュネーヴ大学文学部で日々、言語学者フェルディナン・ド・ソシュールが書き残した手稿の山を相手に悪戦苦闘していた。ある日、文学部に日本語科の図書室があるのを知り、気晴らしに訪ねてみた。本棚の一角を占めている『定本柳田國男集』全巻が目につき、適当に1冊抜き取って開くと、「瑞西日記」が現れた。日本の農山村の伝統文化を研究する「日本民俗学」の確立者・柳田國男（1875～1962）に、スイスの国際都市に暮らしていた時代のあったことをはじめ知り驚いた。1921（大正10）年から1923（大正12）年、満45歳から49歳にかけて、途中帰国をはさみ、柳田は国際連盟委任統治委員会委員としてジュネーヴに赴任したのである。彼にとって最初で最後の洋行だった。

留学後、私は柳田國男のスイス時代に関する先行研究を探してみたが、スイスに長期滞在して彼の足跡を調べた研究がほとんどない、ということがわかった。状況は何年経過しても変わらなかった。そこで、私は洋行した柳田とほぼ同じ年齢になったおり、ひとつ自分がやってみるかと思い、2009年4月から2010年3月までの法政大学在外研究先を懐かしのジュネーヴ大学に定めた次第である。

ジュネーヴ市内は聞きしにまさる住宅難で、ホテルを転々とする不安定な生活がつづき、ようやく6月になって私は旧知のジュネーヴ大助教授のアパートマンへ下宿できた。ところでその通りの名が、アヴニュ・ド・ポー＝セジュールだったのだ。柳田はすみかとしたホテルの名を「ポーセジュール」と書き記しているが、柳田研究においては、このホテルは久しい以前に消滅し、ジュネーヴのどこにあったのかわからないとされている。ひょっとしてアヴニュ・ド・ポー＝セジュールにあったのではないか。そう思い、調べてみると、それを証明する資料がつぎつぎ出てきた。1922年7月以降、柳田はホテルを去って、ヴィラ（別荘風の一戸建て）に2度転居しているが、その転居先や、柳田の事務室も、ポー＝セジュール・ホテルの近所だったことも確認できた。

なんという偶然だろう、私は90年ほどのタイムラグを介してとはいえ、柳田國男の隣人になってしまったのだ。

ポー＝セジュール・ホテルは、1942年にジュネーヴ州立病院に買収され、ポー＝セジュール病院となった。ホテル時代の建物は小さな管理棟が転用され残っているだけで、柳田が泊まった豪華な宿泊施設は跡形もない。それでも私は、ホテルの庭で撮られた柳田の記念写真（「七月二十日／ホテルポーセジュールの庭にて」という直筆の裏書きがある）のコピーを手し、病院の中庭に入ってみた。痕跡が見つかった。柳田の背後に写っているテラスの欄干が残っており、足下の泉も植え込みに転用されながら、コンクリートの縁が残っていた。

このテラスと泉は、写真に撮られていただけではない。柳田の名エッセイ「絵になる鳥」（初出タイトル「野鳥雑記」1930年）に点描されているものだ——「ホテルの庭の南に向いた岡の端は、石を欄干にした見晴し台になつて居て、そこにはささやかなる泉があつた。それとは直角に七葉樹の並木が三列に植ゑられ、既に盛り上がるやうに沢

山の花の芽を持つて居る。」七葉樹とはマロニエのこと。柳田はこのマロニエ並木の端の一番低い枝で巣作りをしていた白い小鳥の夫婦を、愛情深く観察した。エッセイでは、それは「或る年の五月」とのこと。記念写真の左端には、マロニエの幹とおぼしき幹まで写っている。小鳥たちの出会いと別れの記念として写真が撮られた可能性もある。

古い写真や文献を介することで、現在の風景のうちに過去の風景を透かし見ることができる。風景が多重化する。そして目に止まらないはずだった平凡な一角が自分にとって特別なものに変容するのは、妙に楽しい。

ホテルや柳田の借家があったシャンベルという地区は、ジュネーヴの地誌のうえではどのような場所なのか。ここは市の南側の郊外の台地である。フランスとの国境に近く、フランス・アルプスのサレーヴ山がまじかに迫って見える。19世紀半ばにジュネーヴ市を取り囲んでいた壁と堀が撤去されて以降、シャンベルの林野は、裕福な市民層向けの風光明媚で緑豊かな高級住宅地として開発されていった。だから野鳥が多かったのだ。現在も緑の豊かさは保たれており、私も朝の散歩中に幾度か邸宅の庭に遊ぶリスを見かけた。

足かけ3年に及ぶシャンベル居住は、柳田國男にとって大いに意味のある経験となったはずだろう。

「瑞西日記」や書簡から、柳田がシャンベルを中心に田園地帯を好んで盛んに散歩したこと、ときには国境を越えてフランスのオート＝サヴォア県の町村や、サレーヴ山麓まで足をのぼしていたことがわかる。柳田は風景から歴史や生活を見てとる天才である。ジュネーヴ南郊の散歩は、気晴らしをかねた民俗学的フィールドワークとなったに違いない。

彼の蔵書中には、スイス時代に購入したとおぼしきスイス西部の伝



ボー＝セジュール・ホテルのテラスに立つ柳田國男（成城大学民俗学研究所提供）



ポー＝セジュール病院テラス（2009年筆者撮影）

説やオート＝サヴォアの民俗に関するフランス語書籍がある。『遠野物語』のインフォーマント佐々木喜善へ、ジュネーヴからこんな手紙を送ってもいる。ジュネーヴの中心部はニューヨーク並みの近代都市だが、定期市には民族衣装をまとった農婦たちがオート＝サヴォアからやって来る。彼女たちの親類の家には、ザシキワラシとよく似た「セルバン」という精霊が住んでいて、家事を手助けしたり悪戯をしたりするのだろう。そう思うと、日々目にする「山々の雪や雲迄も親しくおもはれ」る（1922年12月9日付け）。

『遠野物語』（1910）以来、柳田は日本の山の民俗に強い関心を抱き、民話中の「山人」がヤマト民族北上以前に列島に定着した先住民を表象しているのではないかという仮説を立て、その証明のために資料を収集していた。積年の研究は、帰国後ほどなく『山の人生』（1926）として発表される。スイス時代の柳田は、アルプスの民俗と、日本の山岳地帯、とくに東北の山地の民俗を比較しながら、構想を練っていたと考えられる。

シャンペルを散歩しながら柳田はなにを考えていたのだろうか、などと考えながら私はシャンペルを散歩していて、ふと思った。ここは成城に似ている！（私は成城大学の非常勤をした経験がある）

1900年の柳田家入籍以降、彼は養父・養母と牛込加賀町——法政大学の近く——に住んでいた。うっそうとした庭木に囲まれた古い和風建築だった。洋行以前に、田園に囲まれた郊外の住宅地に暮らした経験はなかった。それがジュネーヴから帰国して約4年後の1927年、北多摩郡砧村（現・世田谷区成城町）に移住し、盛んに武蔵野を散策しながら、野鳥観察や、武蔵野開拓史の考察をするようになる。彼の郊外移住は、長男を通わせていた成城学園が牛込原町から砧への移転にともなって、生徒の家族を中心とした「学園村」を計画したのに応じたものだが、彼自身のうちにはスイスで知ったライフスタイル

を日本で試みるというモチーフが潜んでいたのではないか。

彼はみずからユニークな新居を分譲地に設計した。柳田家の本地・長野県飯田の民家の趣を取り入れた木造洋式建築、一種の「ヴィラ」である（飯田市美術館の敷地内に移築・公開されている）。ツルバラの生け垣は、ジュネーヴの第一のヴィラの「小薔薇」（「瑞西日記」七月二十日）を想わせる。ポー＝セジュール・ホテルの庭の芝生で籐椅子に腰掛けた柳田の写真がある。柳田は成城の庭も明るい芝生とし、やはり籐椅子に座ってくつろいでいる姿を写真に残している。

たかが個人の住居の問題と軽視するべきではないだろう。帰国後の民俗学上の抱負を語る、ジュネーヴからの手紙のなかで、「我々は精確な学問をせねばならぬやうに精確に生活をして見ねばならぬ」（佐々木喜善宛 1922年12月9日付け）と宣言した柳田である。現在私は彼のジュネーヴ生活の詮索を通じ、1920年代から1930年にかけての柳田民俗学の捉えなおしをもくろんでいる。